

銀行理論と金融危機

4. 銀行システムと金融危機のマクロモデル

池上 慧

東京大学経済学部 4 年

October 7, 2017

問題意識

- ▶ 銀行はアロー証券の取引が実現できない代わりにある程度のリスクをプールし負債を発行する主体
- ▶ 銀行が存在すること自体が、現実にはアロー証券が完備された経済に比して不完備な市場であることの証左
- ▶ この事実はモデルの範疇を超えて成り立つ命題
- ▶ どう効率的でないのかを以下のモデルで見ていく

モデルの概要

- ▶ $t = 0, 1, 2$ の 3 期間
- ▶ 経済主体は家計、銀行、企業家
- ▶ 無限の家計、無限の銀行、銀行と同数の企業家が存在

$$t = 0$$

- ▶ 家計：初期資産 1 を全額預金する。
- ▶ 銀行：預金された初期資産を全額企業家に貸し出す。また預金のグロスのリターン D を決定する。
- ▶ 企業家：1 単位の消費財をインプット

$t = 1$

- ▶ 家計：流動性選好 θ を知る。確定している生涯所得 m に対して、金融危機発生の有無ごとの消費計画を立てる。この時同時に預金引き出し額（流動性需要関数）が決定される。
- ▶ 銀行：家計の流動性需要に応えるために、貸し出している企業家プロジェクトのうちで、次期にもたらす収益が現段階でプロジェクトを中断して利率 R で再運用した際の収益を下回るものを中断させ、消費財として家計に払い出す（流動性供給関数）。
- ▶ 企業家：特に何もしない。銀行から中断と判断された企業家のみここで廃業する。

$t = 2$

- ▶ 家計： $t = 1$ で決めた消費プロフィールに従って消費活動を行う。
- ▶ 銀行： $t = 1$ で潰さなかった企業家が生産した資本財のうち、自身の取り分として割合 γ だけ所持する。企業家による資本財を用いた消費財生産が終了したら、所持している分の資本財を競争的な資本財市場で価格 q_2 で売払い、売却益を得る。
- ▶ 企業家： $t = 1$ で生き残った企業家のみが行動をとれる。資本財を ω だけ生産する。生産した資本財を用いて消費財の生産を行い家計の消費分を賄う。消費財生産が終わった後、自身の所持割合である $1 - \gamma$ だけ資本財を競争的な資本財市場で価格 q_2 で売払い、売却益を得る。





